

対話表現法研究試案

——大阪方言を素材として——

山 木 俊 治

一 対話の内面的契機

話し手が聞き手に対して何らかの言語表現をするばあい、内面的

契機として、待遇意識と反応期待が考えられる。前者は、話し手に
対して聞き手を、聞き手に対して話し手自身をどのように待遇して

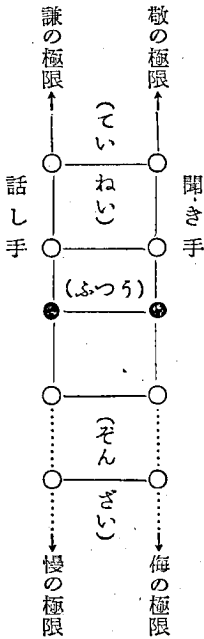
いるかということである。後者は、対話の際、話し手は聞き手に対して言語なり行動なりによる何らかの反応を期待しているということである。この二重の内的契機に支えられたもの——待遇意識にいろどられて、反応期待が種々の相をとったのが、具体的な対話表現であるといえる。以下それぞれをもう少し分析してみる。

—待遇意識—

待遇意識は、話し手↕聞き手という人的関係の上に働く。故に待遇表現の諸相は、この人的関係を話し手がいかに把握するかという把握の種類ということになってくる。

聞き手に関する言いかたにあつては、話し手自身の座を動かさず、聞き手の座を敬の極限から侮の極限まで各様に動かす。話し手に関する言いかたのばあいは、聞き手の座を不動に、話し手自身の座を謙の極限から慢の極限まで各様に動かす。この二種の把握体系は倫理的に対応した緊張関係をもつ。敬に対する謙、侮に対する慢という対応的緊張関係を示す。

さて、これら対人関係のとらえかたを待遇価値という点からみると、結局、ていねい(敬・謙)か、普通(対等)か、ぞんざい(侮・慢)かという一元に帰しうる。



(対人関係把握の種類については藤原与一先生の御講義「方

「言の研究」・堀重彰氏「日本文法機構論」参照)

以下述部構造に中心をおいて、大阪方言にみられる基本的な待遇法を図示すると次のとおりである。

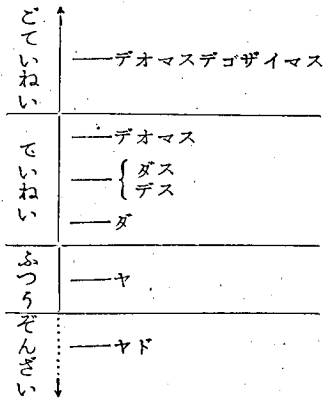
聞き手、第三者に関する言いかた。(例「書ク」)

ねごて	オ書キナハリマス
い	オ書キヤス
て	書キヤハリマス
	書キヤハリマス
	書カハリマス
い	書キナハル
	書キヤハル
	書キヤハル
	書カハル
い	書キハル
	書キヤル
	書キヤ
ふつう	書ク
	書ク
ぞんざい	書キヨル
	書イトル
きわめてぞんざい	書キヤガル
	書キクサル

自分に関する言いかた。(例「行ク」)

ごていねい	行キマスデオマス
ていねい	行キマツサイ
	行キマツセ
	行キマツサ
	行キマス
	行キマ
ふつう	行クデ
	行クワ
	行ク
ぞんざい	行クド
	行クタル

指定したり断定する言いかた。



—反応期待—

対話において、話し手が聞き手に期待する反応がいかなるものかという点に基準を置いて、対話表現の分類を考える。

まず、期待される反応に積極的なものから消極的なものまでいろいろ程度の差があることに気づく。たとえば平敘表現においては、聞き手は傾聴していればよく、その点極めて消極的な反応だといえる。これに対し、命令表現や発問表現においては、行動や言語にはつきりうちだした反応が期待されるのであり、積極的の反応といえる。そこで対話表現を大きく、消極的の反応期待表現（平敘表現）と積極的の反応期待表現（命令・禁止・勧誘・発問・呼掛応答表現）に分ける。一口に消極的、積極的とはいっても、その間には、さらにその程度に応じて、より消極的なものからより積極的なものまでいろいろあるのは勿論である。

次に積極的の反応期待表現をみると、その反応の手段によって、行

動反応期待表現（命令・禁止・勧誘表現）と言語反応期待表現（発問・呼掛応答表現）に分ける。

行動反応期待表現は、聞き手に行動による反応を期待する。そのばあい、その行動に二面性があることに気づく。即ち、これから起されるものか（正項的）、停止されるものか（負項的）ということである。そこでこれを、正項的行動反応期待表現（命令表現）と負項的行動反応期待表現（禁止表現）に分ける。

言語反応期待表現についてみたばあい、発問表現と呼掛応答表現のばあいとは、その反応の積極度に大きな差があるので、これを、積極的言語反応期待表現（発問表現）と消極的言語反応期待表現（呼掛応答表現）に分ける。

結局、対話表現は、反応期待という内面的契機に基準を置いて、次のように分類できる。

積極的の反応期待表現

行動反応期待表現

正項的行動反応期待表現（命令表現）

負項的行動反応期待表現（禁止表現）

言語反応期待表現

積極的言語反応期待表現（発問表現）

消極的言語反応期待表現（呼掛応答表現）

消極的の反応期待表現（平敘表現）

以下それぞれの表現について考える。

二 積極的反応期待表現

1 行動反応期待表現

行動反応の期待のしかたには、直接的な表現から間接的な表現まで種々の段階がある。これは待遇意識の如何と密接に關係する。

直接的表現 「行ケ」(「行クナ」)
間接的表現

(1) 反語的表現 「行カンカ」 「行ケヘンカ」 「行カントカンカ」
「行カントカヘンカ」

(2) 勧奨的表現 「行タラドーヤ」(「イカントイタラドーヤ」)

(3) 依頼的表現 「行テクレ」(「行カントイテクレ」)

(4) 願望的表現 「行テホシイ」(「行カントイテホシイ」)

その間接度にも程度の差があり、(1)(2)(3)(4)の順に高くなる。より間接度が高いということは、より待遇度が高いということと関連する。更に間接的表現の一つの態として、テンスに關係のある表現もみなければならぬ。

A 正項的行動反応期待表現

(1) もっとも單純直接的な命令のしかたとしては命令形むきだしの形をとる。女子のことは連用形をとる。「ハヨ 行キ」入「早く いらっしやい」Vこの言い方がやさしく上品に聞えるのは、「なざる」ことが内包されているところからくる。それにしても直接的な言い方であることは、連用形がエ段で終る下一段のばあい、「ウケイ」のようにイ母韻を重ねたり、上一段、サ変のばあい、「オキイ」「シイ」のように、更にイ母韻を強くひびかせたりするところにもよくうかがえる。ていねいさが意識されると、内包されている「なざる」ことが形式面にでてる。

(2) 反語的表現ではまず「ンカ」「ヘンカ」をとった形が考えられる。「歩キンカ」「歩カヘンカ」「歩ケヘンカ」「ンカ」より「ヘンカ」の方がより間接的である。ていねいになると「ナハランカ」「ナハレヘンカ」、さらに「ナハレシマヘンカ」をとる。

注意される言い方に、四十代以上の婦人には、「連用形ーデ」「歩キデ」といふ言いかたがきかれる。「歩キデ」は、特に老婦人にきかれる「歩キデンカ」といふ反語的命令の、反語の部分(「ンカ」)が沈められたものか。しかし一度そういう形に定着すると、「歩クデ」などの「デ」からの類推も手伝って、文末助詞化していく。それにしても、「歩キ」にくらべて、より間接性が感じられるのは、出自からくるニュアンスといえよう。

(3) 勧奨的表現としては、まず「ーシタラ ドーヤ」といふ形が考えられる。(「起キタラ ドーヤ」)ていねいになると、「ドーデオマス」「ドーダス」「ドーデゴザイマス」となる。

更に間接的な勧奨になると「ーシタラ エー」「ーシタラ ヨロシイ」「ーシタ ホーガ エー」「ーシタ ホウガ ヨロシイ」といふ形をとる。これらに対する反語的表現もある。「ーシタラ エーヤ ナイカ」「ーシタ ホーガ ヨロシイヤ オマヘンカ」。

(4) 依頼的表現としては、まず「ーテ クレ」の形が考えられる。「見セテ クレ」「テクレ」と依頼した形は、それだけ一歩退いた、より間接的な言い方といえる。しかし「クレ」もやはり「クル」の命令形むきだしであり、それだけほんざいさはまぬがれない。女子のことは呼ばれて「ーテ オクレ」の形をとる。この「ーテオクレ」が短呼されて、「ートクレ」「見セトクレ」、更に「ートー」「見セトー」となるばあいがある。いずれも中年以

上の婦人ことばである。

一方「一テ オクレ」の「オクレ」が洗められて「一テ一」となるばあいがある。「見セテ」(一) 若い世代の女子ことばである。

ていねいになると、「一テ オクレ」に内包されている「なさる」が浮かび上って、「一トクナハレ」(「見セトクナハレ」)となる。

これら「クレ」系が反語的表現をとると、「一テ クレンカ」「一テ クレヘンカ」「一テシテ モラウ」という形もある。「見セテモラウ」(一) これは「クレ」より更に間接的である。しかし用い方により、おしつけがましい独りじめにもなる。

(四) 願望的表現では、「一テ ホシイ」「一テ モライタイ」という形をとる。「見セテホシイ」「見セテモライタイ」(一) この言い方では反語的表現をとらないということは、それだけこの種の言い方が、自分の主観的な気持ちに中心をおいた言い方だといえる。行動期待としては極めて間接的である。

(五) テンスに關係ある表現態としては、まず完了表現法をとった形があげられる。「ドイタ ドイタ」「マッターリ マッターリ」「ムコム イテ！」(このばあいの「一テ」は前述(三)の「一テ(オクレ)」とはちがう。語調も「ムイテ」と「ムイテ(オクレ)」のちがいがある。)(「オイデ ユータラ！」などである。これらにはこれとして間接的な言い方にやわらげられた心づかいがある。これに関連して、「ハヨ ショーナ」△「早くしよ」上▽「ハヨ イク イク」などやはりテンスに關係ある表現法もあわせ考えねばならぬ。

B 負項的行動反応期待表現

(4) 直接的な表現としては、禁止の「ナ」をとる。男ことばでは「終止形一ナ」、女子ことばでは「連用形一ナ」の形をとる。ていねいになると、女子ことばに内包されている「なさる」ことばが表現面にあらわれる。

これに比し、幾分間接性をもつものに、「一シタラ アカン」「一シタラ イカン」がある。「アカン」とならんで「アケヘン」「アカヘン」がある。ていねいになると、「アキマヘン」「イキマヘン」「アケシマヘン」という。

これらとともに、「一セントケ」△「ししないでおけ」▽がある。女子ことばでは「一セントキ」となる。

(四) 反語的表現をとると、「一セントカンカ」「一セントキンカ」「一セントカヘンカ」「一セントケヘンカ」、ていねいになると、「一セントカシマヘンカ」、「セントケシマヘンカ」という。

反語の気持が強くなると、「ナキタケリヤ ナキタイダケ ナケ」というように、逆の動作をすすめるような言い方をとる。皮肉な又は憤意をこめた言い方になる。

(六) 勸奨的表現としては、「一センガ エー」「一セン ホーガ エー」「一セン ホーガ ヨロシイ」となる。反語的表現をとると、「一センガ エーヤナイカ」「一セン ホーガ エーヤナイカ」、ていねいになって、「一セン ホーガ エーヤオマヘンカ」「一セン ホーガ ヨロシイヤオマヘンカ」という。

「一シタラ ドーヤ」に対応する形に、「一セントイタラ ドーヤ」、ていねいになって、「一セントイタラ ドーダス」「一セントイタラ ドーデオマス」という。

(二) 依頼的表現になると、「クレ」系のものとしては、男子ことばの「ーセントイテクレ」、老婦人向の「ーセントイトー」、若い世代の女子ことばの「ーセントイテ」がある。ていねいになると、「ーセントイトクナハレ」という。これらにも反語的表現がある。「ーセントイテクレンカ」「ーセントイテクレヘンカ」「ーセントイトーカ」「ーセントイテンカ」「ーセントイトクナハレヘンカ」。「モラウ」系としては、「ーセントイテモラウ」、ていねいになつて「ーセントイテモライマホ」、反語的表現になつて「ーセントイテモラエンカ」「ーセントイテモラエヘンカ」「ーセントイテモラエヘンカ」「ーセントイテモラエシマヘンカ」となる。

(三) 願望的表現では、「ーセントイテホシイ」「ーセントイテモライタイ」となる。これに対する反語的表現はない。

(四) 「ナカントコー」「イラン コトワ ユワントクー」など、テンスに關係ある間接表現法も考えなければならぬ。

2 言語反応期待表現

A 積極的言語反応期待表現

聞き手が言語でもって反応することを期待する表現で積極的なものをいう。佐久間博士の「発問」とよばれるものである。博士はさらにこれを疑問詞を含むばあい(疑問)と、含まぬばあい(質問)とに分けておられる。要するに、相手によびかけて、「答をまちうける、解答を要求する」表現をさす。

(イ) 質問表現

まず発問の特性的語詞「カ」をとつた質問表現をみる。「イヶカ」は単純な問いである。これに対し、「イカヘン カ」「イヶヘ

ンカ」のように否定表現に「カ」助詞をとつた形は、より間接的な問いだといえる。このもつてまわつた言い方は、語調をかえれば前述のように、円曲な勧誘的行動反応期待表現にずれていく。

次に注意すべき言い方に「ヤロ」(ヤナウ)に「カ」をとつた「ーヤロカ」という言い方がある。この言い方は、一度心の中で足踏みした言い方である。それだけその足踏みのしかたでいろいろな気持をうちだしてくる。が、質問表現ではこの言い方は一般にやわらかといえる。相手に敬意を意識した問い方には、これがさかんに使われる。「アシタ キテ モラエマツシャロカ。」このばあい、「ヤロカ」には「だろるか？」という推量の意はない。言わんとするところは、「キテ モラエマツカ」と同じく、来てもらえるのか来てもらえないのかという意である。それを「ヤロ」と足踏みすることにより円曲に「ていねいに」表現する効果をだす。推量か円曲かは語調によって言いわけられる。

「カ」に対し、「ノン」、「ン」をとつた言い方がある。「カ」のかどだたしきにくらべてこれはやわらかである。

「カ」はより論理的、「ノン」「ン」はより情緒的といえる。たとえば、「行ク カ」は、比較的「行くー行かない」事からそのものに中心をおいた問い、「行ク ノン」「行ク ン」は、その事からの主体である相手の気持に中心をおいた問いといえる。それだけ相手の気持への切りこみ方は深い。この「カ」と「ノン」「ン」の表現差は、前者が体言又は体言相当格にも接続する一敘述性が大いにに対し、後者は用言のみにしか接続できぬ所にも見られる。

「ノン」と「ン」では後者は相当品位がおちる。相手に相当の敬意を意識するばあい、「イキヤハリマス ノン」とは言うが、「イ

「キャハリマッスン」とは言わない。「イキャハルン」とはいうが、このばあい第三者の行動について相手に問う言ひ方になるのがぶつうである。「マッス」とれば必ず「ノン」が接続する。

「ノン」「ン」に関連して、同じくナ行文末助詞の「ナ」のこの種の用法が考えられる。たとえば「イク ナ」の形が「行くの？」と問ひかける意味に使われるばあいがある。もちろん、「カ」、「ン」と問ひかける意味に比べて、問ひという作用性においてはよほど間接的である。が、それにしても、単なる感声、呼掛をこえた、問ひの機能がみられることは事実である。

「ノ」にも男ことばとしてこの種の用法がある。

次に、「ノン」「ン」と「カ」の複合した「ノンカ」「ンカ」とするばあいがある。「ノン」「ン」をつよめるか、「カ」をつよめるかにより、又その度合によりいろんな気持がうちだされる。しかし、いずれにしても注意すべきことは、必ず「カ」が下接して、決して「カノン」「カン」とはならぬことである。こゝにも両者表現性のちがいがよくうかがえる。

「カ」が「カイ(さ)」となるばあいがある。このばあいは必ず「ノン」「ン」に下接する。「カイ(さ)」単独の時は発問からは、ずれた言ひ方になる。又前述の「ヤロ」にはつづかない。「ヤロカイ(さ)」となれば発問からずれる。それだけこの言ひ方が露骨な自己心情の表現であることをものがたっている。女子ことばで「カイ」をとるときは、必ず「ナ」を下接する。(「ーノンカイナ」「ーンカイナ」)。

(四) 疑問表現

「ドヨイ イク カ」「ドヨイ イク ノン」「ドヨイ イク

ン」などいづれも単純な疑問表現である。

ていねいな言いかたになって、「ドヨイ イキャハリマッシャロカ」の「ヤロ」が円曲効果に使われるのは前述の通りである。これは第三者の行動に關した言ひ方である。相手の言動に關した言ひ方になると、更に円曲になって、「イキャハリマンノンデッ

ヤロカ」となる。

「ノン」「ン」が「カ」と複合した「ノンカ」「ンカ」、「カイ(さ)」と複合した「ノンカイ(さ)」「ンカイ(さ)」、さらに「ナ」とつた「ノンカイナ」「ンカイナ」などが疑問詞に應じるばあいがある。それぞれの表現性については前項でのべた。

(四) 特性的語詞をとらないばあい。

以上発問表現を、その特性的語詞「カ」、「ノン」「ン」を視點としてみてきた。しかし、もの言ひの實際において、この種の表現にいつもこれらの語詞がとられているとは限らない。むしろ、この種の語詞を表現面にうちだしてこないばあいが多い。このばあいはイントネーションにより発問の意味をうちだす。(後述)

この言ひ方とともに、今一つ注意すべき言ひ方に、疑問のばあいに、「ヤ」ととめる形がある。(「ソレ ナン ヤ」) このばあい、文末を下降調にいうと、非難めいた、なじるような表現になるが、上昇調にいうと、強い疑問の表明になる。「カ」ととめたばあいに比して、これはより主情的である。たとえば、驚き、怒りなどの気持をこめていふばあい、「ナニ カ ナニ カ」ではへんに改まった感じでさしせまった気持の表明にはならない。必ず「ナン ヤ ナン ヤ」という形をとる。「カ」は前述のように事がらそれ自体に注目した、より論理性的の強い言ひ方である。それに対し、

「ヤ」は、より情緒的だといえる。

(一) 発問表現におけるイントネーション

発問表現を形式的に特長づける語詞をとらないばあい、書きことばでは符号「？」を使ってあらわすが、これは全く不可避なことであり、これがなくては、発問の意味があいまいになる。

このばあい、話しことばにおいては、イントネーションが重大な意義をもってくる。前述のように、たとえ発問を特長づけ、語詞をとっていても、語調によっては発問以外の表現になる。即ち、これらとても発問表現を決定する最後のな徴標にはならない。このように考えると、話しことばにおいては、特に発問表現において、その発問におけることば調子、佐久間博士が「構文旋律」とよばれ「音楽的特性」とよんでおられるものが重視されてくる。

一般に質問表現にあつては文末が昇り調子になる。聞き手に返答を要求する度合が積極的になればなる程、文末を上昇調にひきのばす。そこに特に返答をまちうける気持が表明される。反対に降り調子になると、その度合によつて、相手の返答はことさらに要求されなくなり、発問からはずれていく。

疑問表現にあつては、まず疑問詞がつよめられる。大阪方言では高の平板型をとるのがふつうである。佐久間博士の言われるように、疑問の意味をあらわす語に特別の調子を与えることにより、それが疑問の表明であることが明らかになるから、文末が昇り調になる必要はないと思える。発問の助詞をとるばあいも、それで発問表現だということが分るから同様のことがいえる。が、相手の返答を求める積極的言語反応期待表現であればある程、文末を昇り調にひきのばす傾向がよくなるということとは、前述のように、そこに返

答をまちうける気持、それをうながす気持が表明されるのである。

B 消極的言語反応期待表現(省略)

三 消極的反應期待表現

所謂平敘表現がこれにあたる。話し手の独り舞台であり、聞き手は傾聴していればよい。この点、極めて消極的な反応だといえる。しかし、一口に消極的とはいつても、その間にいろいろ程度の差がみられる。文末にいろいろな助辭をとることにより、語調の如何により種々の段階が生じる。そして、ばあいによつては形式的には平敘表現であつても、實質的にはそれ以外へずれた言い方になる。

ピュラーは、言語の三大機能として、表出、訴え、演述をあげている。この演述機能に中心をおくのが平敘表現である。佐久間博士は、「いひたて文」とよばれ、さらにそれが如何なる事態の演述かによつて、「ものがたり文」と「しななだめ文」に分けられる。後者をさらに「性状規定文」と「措定文」に分けておられる。

1 ものがたり表現

まず大きく、文末助詞をとる言い方ととらない言い方に分けて考へる。

(1) 文末助詞をとらない言い方

聞き手の反応に対しては、最も顧慮されない言い方といえる。自己の見聞、気持を一方的につたえたり、話し合いにいちおうの結末をつけたりするばあい、この形式がよくとられる。独白、傍白によくみられる。それだけ消極的な對他性がよくものがたられていく。この性格が逆用されると、語調の如何により、ぶつきらぼうな言い方、不満、なじりの表現などになつたりする。

注意すべき言ひ方に、言ひさしの表現がある。途中まで言つて、あとは一挙に相手にもちかけた解させる。それだけ強い傾聴を要求する。完結態よりは、反応期待という点からは積極的である。

(四) 文末助詞をとる言ひかた。

まず、ナ行文末助詞をとつた言ひ方が注意される。その基本的な特性は「よびかけ」性にある。よびかけ性が強いということは、聞き手の強い傾聴を要求する。この要求の度がすすむと、自然ことばなり行動にうちだした反応を期待することになり、積極的反應期待表現へとずれていく。ナ行文末助詞のこのよびかけ性に頼ると、表現を言ひさしにして、あとは「ナ」「ノ」とよびかけることにより、複雑な内容を一挙に相手にもちかける。

このナ行文末助詞をとつた言ひ方は、平叙表現にあつては、もつとも積極的なものに近い表現だといえる。これと反対の極に立つのが「ワ」文末助詞をとつた言ひ方である。自己の見聞したこと、あるいは意思、感情を自己中心に主張する効果を強く出す。前者が相手に眼を向けた言ひ方であるとすれば、これは自己の判断、情意中心の内向き表現といえる。この表現性のちがいは、前者が前述のように言ひさしの文をもうけることができるのに対し、これは、必ず完結した文をうける、又両者が複合するばあひ、必ずよびかけ性の強いナ行文末助詞が後にくることによつてもわかる。このよびかけ性なナ行文末助詞と「ワ」文末助詞の表現性のちがいが、これらをとつた平叙表現を、消極的反應期待表現ながらも、より積極的な方へとより消極的な方へと特色づける。

2 しなごだめ表現

(四) 特性的語詞である性狀語、措定語むきだしの言ひ方は、相手の

反応をあまり顧慮しない自己の判断の直接的な表現といえる。独立、傍白によく用いられる所以である。

(四) 文末助詞をとる言ひ方において、ナ行文末助詞と「ワ」文末助詞がしなごだめ表現を、消極的反應期待表現ではあつても、その中において、より積極的な方へと、より消極的な方へと分れていく契機になっていることは、前述ものがたり表現における場合と同じである。

(四) 次に注意される二三の言ひ方について考へる。まず「エー」△「よい」▽をとる言ひ方である。品詞論の立場からは形容詞ということにならう。「コノ 品ワ エー」△「よい」▽といふばあひ、この品の状態を述べたもので、まさに性狀規定表現である。ところが「コノ 品ワ エー」△「よいだ」▽と「エー」を強めたばあひ、この「エー」の敘述にみられる二面性は、その反対語の「わるい」「だめだ」の表現差がよく物語つている。両者とも性狀語にはちがいないが、形容詞と所謂形容動詞とはその敘述性に大きな差がみられる。所謂形容動詞とよばれる語の「ダ語尾」、大阪方言では「ヤ語尾」には、やはり助動詞のダ、ヤに通じる措定力が感じられる。「エー」はこのように語調によつては措定になるが、この判断の結果を相手に要求する気持が強くなれば、しなごだめ以外の表現にずれていく。

この「エー」と同じような機能をもつ語に「カメヘン」「ダンナイ」がある。

これら「エー」「カメヘン」「ダンナイ」の反対語が、「アカン」「アケヘン」「イカン」である。「イカン」は他の二語に比べ

て、語気がつよく一言のもとに断定する言い方により多く使われる。

(B) 次に「ネン」に注意する。出自としては「ノヤ」が考えられる。「ヤ」が体言又は体言的なものに接続するのに対し、「ネン」は用言につづく。「ネン」の用法には次の三つの重要な区別がある。

(A) 「ソナイ オモウ ネン。」このばあいの「ネン」には出自は忘れられていても、内包されている「ヤ」の指定性は強くでている。

(B) 「イヤ ネン」「ードス ネン」「ードン ネン」などのように指定語に下接する「ネン」には、出自は忘れられ文末助詞として熟成した機能がうかがえる。

(C) 前述のように「ネン」か指定語とともに用いられて体言又は体言的なものにつづくときは、指定語に下接する。が、用言につづくときは「イク ネン ヤ」のように「ヤ」のみに上接する。これに対して、「ネン デス」「ネン ダス」等のてねいな言い方もあって然るべきだが実際にはなく、そのような必要のあるときは、「イク・ダス」「イクマン・ダス」のような形をとる。とするならば、「ネン ヤ」の「ネン」はていねいに言うときの「ン」「ノン」に対応するといえる。前述のように出自とみられる「ノヤ」の「ヤ」の指定性に重点をおいたのが(A)の「ネン」であり、「ノ」の表現効果に中心をおいたのがこのばあいの「ネン」になると思える。といっても「イクンヤ」「イクノンヤ」と「イクネンヤ」をくらべたばあい、後者により強い指定の語気が感じられる。ここにその出自がよく物語られているし、その故にこそ、ていねいな言い方には「ネンダス」「ネンダス」などの形が用いられないと思える。

(D) 次にテンスに關係のある表現態について考える。まず「シナハッテン」等の「テン」である。「ネン」が主として現在のことに関する判断であるのに対して、「テン」は完了の事実を述べるに用いる。過去又は完了の事実はわれわれにとつてたしかな事実である。この「たしかさ」が強調され、転用されると、「テン」に断定の機能が与えられてくる。こうなると、これらの「テン」にはほとんど文末助詞としての色彩が強くなってくる。

「タ」にも同様の機能がみられる。「コノ コトワ マヘニ ハツキリ ユートイ タ。」△「言つておいたのだ。」▽

次にやはりテンスに關係のある言い方で、現在時、あるいは恒時とよばれる言い方をとるばあいがある。「ボクワ イク！」△「行くんだ！」▽

相手の言動に關係して、この「タ」および現在時の言い方をとる表現の指定性が方向をかえると、相手の言動をうながす強い言い方になつてしなだめ表現からは、ずれていく。

(E) 最後に「テ」、「ト」で言いさした表現についてみる。「コッチャテ。」△「こちらだというんだよ」▽「ボクモ イク ト。」△「子供が」僕も行くと言つてるんだよ。「▽このように「テ」「ト」で言いさした表現は、あとは一挙に相手にもちかけて複雑な内容をつたえる効果をもつ。この「テ」「ト」に、表現面下に沈められた「……というのだ」などの判断の気持が内包されると、これに指定の語気が生じ、これらが文末助詞に転成していく契機となる。

(武庫川学院女子大学助教授)

x x x